

好評頒布中

「江東古写真館」

～思い出のあの頃へ～

昨年10月1日刊行の『江東古写真館』は、好評のため、このたび増刷しました。



永代橋と深川(昭和30年頃)

下町文化

NO. 228
2005.1.12

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL.(03)3647-9819
<http://www.city.koto.tokyo.jp/>

『江東古写真館』好評頒布中!

公開講演会講演録

「江戸を掘る 江戸遺跡の現状と課題」

芭蕉記念館新展示

「近代俳句の黎明」

囲炉裏ばた 「障子貼り」

旧大石家特別公開事業報告

白木さん木屋賞受賞!

伝統工芸保存会、善意の寄附

あるく・みる・きく・かく文化財レポート

「鷲替神事」

講習会20周年記念シンポジウム

工匠式番館企画展



頒布場所	住所
生涯学習課	区役所6階
広報広聴課	区役所4階
江東区文化センター	東陽4-11-3
東大島文化センター	大島8-33-9
豊洲文化センター	豊洲2-2-18
砂町文化センター	北砂5-1-7
森下文化センター	森下3-12-17
古石場文化センター	古石場2-13-2
亀戸文化センター	亀戸2-19-1
総合区民センター	大島4-5-1
深川江戸資料館	白河1-3-28
芭蕉記念館	常盤1-6-3
中川船番所資料館	大島9-1-15

『江東古写真館』思い出のあの頃へ』は、昭和30～40年代を中心とする古写真約90点を集めた写真集です。映画館、都電、ノリ干し、金魚池、田園、木場といったなつかしいふるさとの情景がそこにあります。また、現在の様子を撮った写真と見比べることで、風景の移り変わりもわかります。ご覧になれば、その変化の大きさにおどろかれますでしょう。

本書を手になされ、あらためてふるさと江東について語り合ってみてはいかがでしょうか。ぜひおすすめていたします。

頒布価格 1000円(A4版96頁)

刊行の経緯

『江東古写真館』は、平成3年3月に刊行された『想いDE写真館』の続編として企画しました。先輩格の『想いDE写真館』は、130余点の写真を掲載し、現状の写真を添えたもので、大変ご好評をいただき、完売となっています(図書館で閲覧できます)。その後も、在庫や、掲載写真の利用希望などのお問い合わせをいただいていることから、復刊も検討しましたが、他にもご紹介したい古写真もあることから、体裁をあらたにした写真集を刊行することにしました。

古写真展の開催

もう本書をご覧になられた方のなかには、あれっ、この写真は最近見たなと思われた方もおられるかと思いますが。実は、掲載した写真の中には、昨年1月26日から30日の間で、区役所2階ロビーで開催した写真展「江東のむかしといま」で展示した写真が含まれています。最近見かけたと思われる方は、この写真展で見られたのではないのでしょうか。



写真展では、30点の古写真と、対応する現状の写真、そして撮影ポイントを落とした地図を展示しました。また年表や、江東区の人口・面積の移り変わりといった資料パネルも展示しました。ここまで来ると、本書の内容と似通った展示であることに気づかれるでしょう。本書の骨格は、この写真展によっているのです。

文化財係所蔵の古写真

写真展で展示した古写真の大部分は、文化財係所蔵のものであります。以下、所蔵古写真のうちで、ある程度まとまりを持つ写真群をご紹介します。

【昭和32年刊『江東区史』写真】

所蔵古写真の柱となる写真群は、旧『江東区史』編さん時点さんで撮影されたものです。541点あり、現在は係でネガを所蔵管理しています。昭和30年ごろの江東区を写した写真としては、おそらく一番まとまった写真群であろうと思います。本書には55点を掲載し、結果全体の6割を占めました。



辰己武蔵野館(昭和30年頃)
(門前仲町2-10)

【大正14・15年刊『深川区史』写真】

次に、江東区の前身である深川区時代に刊行した『深川区史』の写真群が注目されます。原簿のガラス乾板(106点)自体が文化的価値を有していますし、大正末という年代は所蔵古写真のなかでは古い部類に入るなど、大変貴重な資料となっています。内容は、絵画や地図、石造物などの資料を撮影したものが多く、波除碑なみよけいの写真などは、大変資料的価値が高いものとなっています(写真参照)。



波除碑の今昔(平久橋西詰)
左:平成16年、右:大正12年以前

一方で、

風景写真は22点と少なく、うち「猿江の三橋」を本書(16頁)に掲載しました。



猿江の三橋(大正12年以前)

【昭和42年刊『江東区二十年史』写真】

『江東区二十年史』は、区誕生から20年という節目に刊行されました。その掲載写真は編さん過程で撮影収集されたものです。係には、掲載写真を厚紙に貼った写真帳があります。ネガがないため、一枚ずつ接写してネガを作成し、紙焼きの整理を進めています。一部は、本書にも収めています。

この他、

寄贈を受けた写真などもあります。また借用した写真は複写してお返ししています。

古写真整理

係で所蔵する写真の出所は、さまざまです。そして整理もいろいろアルバム、ファイルなどを用いており、統一されていません。このため、必要な写真をたやすく見出すために、統一した検索手段を整えています。すべての古写真について、写真を貼った写真帳を作り、検索の便に役立つようにしています。検索台帳は、地域ごとに



小名木川遠望(昭和40年頃)(北砂3と大島4の境)



古写真検索台帳

87頁で古写真を紹介しています。『想いDE写真館』と比べて掲載点数が少ないのは、古写真をなるべく大きくお見せしたいとの考えからです。また、表紙や中扉などにも極力載せましたので、掲載点数は計92点になりました。

古写真は深川北部、深川南部、城東北部、城東南部、臨海部に分けています。上段は、古写真を出来る限り大きく載せて解説文を付し、下段には撮影ポイントと落とし地図と現状の様子を撮った写真を添えました。



本文(86頁)

また、巻末には資料編として、年表、人口などのデータ、電車案内図(昭和32年)、江東区詳図(昭和30年)などを載せました。そのうち電車案内図はよく知られた

ものですが、昭和32年版はあまり刊行物に載っていないのではと思います。



電車案内図(昭和32年)

古写真を選ぶ

予算額をにらんで掲載点数を割り出し、検索台帳に目を通しながら、地域ごとにピックアップしていき、それらを地図に落とししていきます。ここで苦労したのは撮影場所の割り出しです。写真とにらめっこしながら、地図に落とししていきました。そうすると、やはり富岡八幡や亀戸天神などを取り巻く観光スポットの写真が多くなってしまいました。できる限りかたよらないように選びました。その後、現地に行き、現状写真の撮影を行いました。あまりの変わり様に驚きながらシャッターを切りました。

古写真のなかには、『想いDE写真館』と重複する写真があり、4、13、14、29、49、75頁の写真がそれにあたります。これらに写されているのは、新大橋、福富川水門、猿江材木貯木場、門前仲町交差点、亀戸九丁目京葉道路、南砂ノリ干しです。江東区の地域的特徴をよく

表している写真ばかりで、重複するから載せない



ノリ干し風景(昭和30年頃)
(南砂2-23付近)

いというのでは、区の景観を知ろうではもったいないと思いました。なかでもノリ干しは、砂町地域ではよく見られた光景ですが、その写真はあまりなく、『想いDE写真館』掲載のものが主になります。また、ノリ干しだけではなく、砂町地域の古写真は他地域と比べて少なく、今後の収集がまたれるところ です。

古写真を集めています

「百聞は一見にしかず」とはよく言ったもので、写真を見れば当時の様子がまたたくまによみがえってきます。失われた風景は、もうみなさんの心の記憶と写真の中しかありません。今後写真展や写真集などで広くご紹介していきたいと思っています。また昭和40年代以前の古写真をお持ちでしたら、お借りして複写させていただきたく思います。ご連絡をお願いします。みなさんのご協力によって、ふるさとの風景を残していきたいと思っています。

お詫び

不本意ながら、第1刷で一部誤りがありました。正誤表により訂正し、お詫び申し上げます。第1刷を購入された正誤表を希望される方は、お手数ですが、文化財係までご連絡をお願いします。正誤表をお送りいたします。

検索台帳を見ると、現在整理済みの古写真は、深川北部256点、深川南部201点、城東北部144点、城東南部81点、臨海部100点、計782点となっています。この点数は、あくまでも文化財係で収集したものであり、区全体で把握されたものではありません。他の部署でも古い写真を資料として持っている場合もあります。それらも含めたデータベースの作成は今後の課題です。

『江東古写真館』の構成

体裁は、A4版縦の計96頁で、うち

江戸を掘る

江戸遺跡の現状と課題

早稲田大学人間科学部教授

谷川 章雄 先生

本日は近世考古学とは何か、また何がわかってきているのかというお話をします。近世考古学という分野が盛んになり始めたのは20年ぐらい前で、ここ10年、つまり90年代に入ってから市民権を得るようになりました。私が特

に対象としているのは江戸で、現在の千代田・中央・港・新宿・文京・台東・墨田・江東の8区がそのおおよその範囲です。18世紀前半の江戸の人口はだいたい町人と武士が50万人ずつで、神官・僧侶が2万6千人、その他のさまざまな階層の人々を入れて、合計130万人ぐらいといわれています。その中で江戸の敷地の約7割が武家地、2割以下が町地です。

考古学といえば縄文や弥生・古墳時代などが中心で、近世という新しい時代の遺跡を掘るといふことに対して、なかなか理解されませんでした。転機となりましたのは70年代で、中世考古学が成立してきたということと、歴史学の中で都市に対する関心が高まって

きたという素地がありまして、近世考古学が次第に認められるようになりました。この時期に江戸遺跡の発掘が始まりました。東京というのは大都市で開発も盛んに行われていきますから、江戸遺跡は壊されて残っていないだろうというのが大多数の見解であったと思います。それが70年代の中頃から都心の各地で江戸遺跡がみつかり、この発見が非常に大きかったと思います。そして80年代に入って江戸遺跡の発掘が盛んに行われるようになりました。

以上のような経過をたどりまして近世考古学が行われるようになりました。が、当初からよく「江戸なんか掘って何になるのだ」といわれました。そこで江戸遺跡を発掘する意味を論理的に説明できるよう考えました。私は、江戸時代の歴史を考える上で三つの窓口があると思います。まず歴史学、つまり文字の記録ですね。もうひとつは民俗学、伝承やしきたりです。そして遺跡を扱う考古学の三つです。私は歴史学や民俗学だけですべてがわかるとは思いませんし、考古学だけですべてがわかるとも思いません。これらの学問がすべて束ねられて江戸時代が本当にわかるのではないかと思います。私は歴史学が対象とする文字の記録には次のような問題点があると考えます。ま

ず、文字記録には書き残す理由がある、つまり書き残す必要のないものは残らないということ。次に書き手の立場が介在する、つまりそこには書き手の意思が反映されており、書かれていくことがすべて正しいとは限らないという点です。そして、日常生活が記録されにくいという点が重要です。つまり江戸時代の人々の生活の実態がわかりにくいのです。これらを考えるときに文字記録だけでは限界があるのです。一方、伝承やしきたりを研究対象とする民俗学は人々の日常を記録したものです。が、村落が中心で都市はあまり対象とされませんでした。以上から私たちは考古学によって江戸時代の人々の生活がより鮮明に描き出せるのではないかと考えたのです。もちろん考古学にも限界がありますが、歴史学・民俗学・考古学が互いにその限界を認識することが重要なのです。

それでは江戸遺跡の発掘調査からいつたい何がわかったのかについて具体的にお話ししていきます。

江戸城の普請の実態

江戸城の北の丸公園の発掘調査において8mもの盛土が発見されました。これにより家康入府以降に江戸城を造る際、かなり手を加えたことが実際に確認できました。江戸城の普請ふしんというのは大規模な土木



江戸城の盛土
『江戸城跡北の丸公園遺跡』より

工事だったのです。次に寛永13年(1636)に行われた江戸城の外堀普請の石垣を

みましよう。この外堀普請は幕府が各大名に担当を割り振り、一気に作りましよう。さらに興味深いのは外堀普請によって出た大量の土を周辺の市街地の造成に使用している点です。つまり、江戸城の外堀普請は都市の拡充と同時に進められたのです。これは外濠そとぼり通りの拡幅工事の際に行われた発掘調査で証明されました。

武家屋敷の研究

先ほど話しましたように江戸の約7割は武家地でしたので、発掘調査も必然的に武家屋敷が多くなり、一時期は武家屋敷ばかり掘っていました。一方、歴史学では従来、武家屋敷というのはあまり研究が進んでいなかった分野でしたが、考古学の成果の増加とともに、近年では大きく前進しています。例えば加賀金沢藩前田家の上屋敷の発掘調査では屋敷の絵図面との比較によって多くのことがわ

かりました。このように文献史料と照らし合わせることによって世界が広がるのが近世考古学の面白いところですし、考えるヒントがたくさん転がっているのです。この調査で大名屋敷の空間的な構造がだいぶわかってきました。大名屋敷は大別して殿様が住む御殿空間と、家来が住む詰人空間とにわかれています。後者が含まれる長屋跡を見ますと、土間やかまど、下水の溝や流しがあつたことが確認できました。また、礎石の存在からこの長屋は瓦葺であつたことがわかります。

町屋の発掘 新宿区の細工町遺跡をみましょう。この町は拝領町屋という幕臣の拝領地に建てられた町で、簡単に言えば幕臣が経営する町のことです。この町の大きな特徴は遺構が密集している、つまり人口密度が高く、住民の流動性も高いということです。だから大量にゴミが発生するのです。次に中央区日本橋一丁目遺跡ですが、幸いなことに江戸中心部の町地の遺跡がそのまま残されており、地割り、石組や木樋の下水溝、土蔵、穴蔵と呼ばれる地下室などが出てきました。また、四谷堀町一丁目という町地では一戸建てがあつたことがわかり、このように一口に町地といっても多様な形態をとっていたのです。

江戸のごみ処理の問題 現在、新宿歴史博物館が建っている三栄町遺跡から、深さ3〜4mの巨大なごみ穴がみつかりました。ここは幕臣の組屋敷で、一時的にごみの投棄場所として使われていたのです。つまり、武家屋敷は江戸時代半ばにはもう解体しはじめ、特に下級武士の生活がかなり崩れていたことがわかってきました。これは考古学の大きな成果といえます。

よく江戸はリサイクル都市であつたといわれますが、三栄町遺跡などのごみ穴をみるとどうも違うのではないかと感じられます。江戸の町人地のごみは基本的に埋め立てで、江東区の永代島や越中島がその場所ですね。よくわからないのが武家地のごみで、大名屋敷ではおそらく自ら処理し、下級武士は敷地内に埋める場合も多かったと思われれます。特に四谷や市谷などの山の手と呼ばれる地域はごみを船で運ばせないので、三栄町遺跡のような巨大なごみ穴ができたのです。次にリサイクルの問題ですが、徳利や茶碗といった陶磁器はごみとして大量に出てきますので、多くはリサイクルされていたわけではありません。ただし、金属製品はかなりの割合で回収されてきました。江戸の遺跡からは鋸や金槌、鍋・釜といった金属製品がほとんど出てきません。これはおそらくコスト

の問題だと思えます。

江戸初期の上水 地下鉄南北線の敷設工事の発掘調査で内側に木枠を入れた寛永13年の木樋が出てきました。また、慶長期の上水樋が八重洲北口から出てきました。これらは神田・玉川上水以前の上水です。どうも神田・玉川上水以前から江戸には上水があつたことがいえそうです。

墓制の研究 大名の墓を見ますと、石室の中に漆喰をはさんだ二重の木の棺桶を入れてあります。旗本になると若干ランクが下がって覆棺になります。上級の旗本の覆棺は炭を詰めた木の箱に入れてあり、手が込んでいます。また、副葬品も鼈甲や数珠といった高級品をもつケースがあります。そして一般の庶民になりますと木棺や直径60cmぐらいの桶になります。さらに都市下層民の墓には副葬品はほとんどありません。墓は密集状態で、まさに投げ込み状態です。墓は身分や階層をもっとも鮮明にあらわし、享保年間（1711〜1716）ぐらいに社会的な身分秩序と墓の関係が固まったと考えます。

江戸の都市空間と地域の歴史 このように発掘調査を続けていきますと、江戸の広さを感じます。また、町地や武家地には実に様々な形があることがわかってきました。江戸には地域性があ

り、それと遺跡との関連がだいぶ読み取れるようになりました。墨田区・江東区はやはり違った雰囲気を持つています。まず、開発が遅れて始まったという点があります。もうひとつは水運です。木場や蔵が多く、さらに多くの寺院が移っています。江東区に眠る遺跡の発掘の成果を期待しています。

最後に近世考古学がどのように活用されているかですが、発掘調査した場所はその後どうなるのかといえます。その多くは壊されてビルなどが建ちます。我々は現代の中に生きていますが、過去に埋め込まれたものの上に立って生きています。ゆえに、そこがどういう場所だったかという土地の記憶を引き継いでいくことが大切であると思います。遺跡の発掘というのは、こういった土地の記憶を目で見ることができているのが大きな特徴です。そして多くの人に見てもらうとともに、後世に何を残していくかということが重要なことです。

***この記録は、昨年10月6日(水)に行われた講演会の要旨です。**



近代俳句の黎明

— 近現代百俳人の遺墨 —

平成17年6月12日(日)まで

江東区芭蕉記念館(常盤1 6 3)では、正岡子規・河東碧梧桐・高浜虚子をはじめ飯田蛇笏・山口誓子・秋元不死男など近現代俳句隆盛の礎となった百俳人の遺墨114点を展示しています。

明治前期の俳壇は、旧態依然とした天保期以降の月並俳諧が主流で、門閥的な宗匠制度が支配していました。

明治20年代に入ると、これら「旧派」に飽き足らず、俳風革新の気運が高ま



高浜虚子・河東碧梧桐・正岡子規

り、正岡子規の「日本派」、尾崎紅葉の「秋声会」、「大学派」とも呼ばれた「筑波会」等が活動を始めます。

ことに、子規は新聞『日本』の俳句欄を通して全国的に俳句革新を進めました。日本派の機関誌ともいえる『ホトトギス』は、愛媛松山の柳原極堂から東京の高浜虚子に引き継がれ、近代俳句確立の中心的勢力となつていきます。子規没後『ホトトギス』は一時総合文芸誌のような形になりますが、大正2年に虚子が雑誌欄を本格的に再開し、渡辺水巴・村上鬼城・飯田蛇笏・原石鼎・長谷川かな女等の俊英が

集まり、ホトトギス俳句の第一次黄金期を迎えます。以後も山口青邨・富安風生・川端茅舎・松本たかし・中村草田男・中村汀女・星野立子等多彩な作家を次々輩出していきます。

一方、子規の没後虚子との対立を深めた河東碧梧桐は、自然主義的な文学運動との関わりの中で新傾向俳句を提唱しましたが、やがて定型破壊・季題無用の兆しがみられ、荻原井泉水等による自由律俳句が出現します。

今回の展示は、俳句黎明期の「旧派」「秋声会」「筑波会」「日本派」「新傾向・自由律」などの作品を系統的にご覧いただくとともに、虚子以降の近現代俳人の作品を併せて114点(内39点が初公開)を紹介します。初公開の資料の中には、渡辺水巴「五つ来て」の句幅(省亭画)や山口誓子「海に出

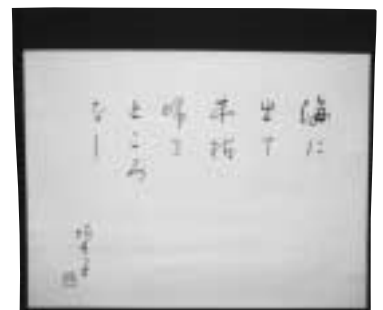


原石鼎・飯田蛇笏



青木月斗

て」の句幅など貴重なものが多数あります。今日の俳句隆盛の源流ともいえる



山口誓子

き近現代百俳人の遺墨を十分に鑑賞ください。
芭蕉記念館 (石渡宏子)

【開館時間】午前9時30分～午後5時

(4時30分までにお入りください)

【展示室休室】月曜日(祝日は除く)

【入館料】大人100円(団体70円)

小中学生50円(団体30円)

* 団体は20名以上

【交通】都営地下鉄新宿線・大江戸線

森下下車 徒歩7分

【問い合わせ】芭蕉記念館

江東区常盤1 6 3

☎ 03 3631 1448

第6回「江東ふるさと歴史研究」の論文を募集します。締め切りは6月24日(金)。詳しくは区報2月11日号および次号の『下町文化』をご参照ください。

障子貼り



冬の小春日和、障子を通して柔らかい日差し。こんな平和な時はあろうか。ふと郷愁とひとときの至福を味わっています。今から8年前、旧大石家住宅友の会に入会しました。交替で毎週1回の掃除・通気・囲炉裏の火入れの日課ですが、季節の移り変わりには、夏は障子を取り外し、秋には又立て入れています。毎年囲炉裏の火入れのため新しい紙に貼り替えています。年を重ね、今年で8回目となります。

今年も11月初旬から1週間に2枚を目安に、4週で完成する予定で作業を致しました。窓2枚、縁側6枚、床の間小2枚、欄間1枚、台所小窓4枚の計15枚です。始めは見よう見まねで剥がし方、糊の煮方、刷毛の使い方、貼り方、切り口の揃え方、紙の切り方、紙の裏表、仕上



げの霧の吹き方等、なかなか面倒な事が判りました。乗りかかった船で、何とか仕上げようと班員全員が気を揃え完成しました。回を重ねるうち手順が判り一番効率的で早い方法が判りました。最近では分担して、剥がし方、障子の掃除方、紙の段取り切り方、糊付け方、貼り方等手分けして完成できるようにになりました。部屋の中の明るさに満足喜びはひとしおですが、困ったことには小学生の見学者が時々ま珍しいのか障子紙を指でつついて穴を開けることです。これには折角のものを、との思いですが、切り貼り補修で何とか難を逃れています。

作業中、昔の思い出がよみがえりました。障子の影絵。狐、鳶、犬の手の影で障子をスクリーンにして兄や姉に教わった思い出にしたり、儉約の教科書で尼僧が障子の破れを直すのに、切り貼りをした等。また大石家の先住者は貼り替えたこの明かりの部屋で家族で何を語っていたのか遡って思いをしたり。また友の会の後に続く方、障子の認識と大石家の楽しさを継承して頂ければとの思いです。俳句の季語に「障子洗う」「障子貼る」「障子貼替」があるの思い出しました。

大石家それぞれ手分け障子貼る

(木曜班 中村正男)

旧大石家特別公開を終えて

教育委員会では、去る10月18日から24日までの一週間、江東区南砂にある旧大石家住宅の特別公開を実施いたしました。旧大石家は、区内にただ一軒だけ残された江戸時代の民家で、区指定文化財(建造物)です。普段は、土・日・休日のみの公開ですが、平日も公開するとあって、期間中は多くの方に「ご来場いただきました」。

来場者の中には、建物に刻まれた歴史に触れ、ただ昔を懐かしむだけでなく、江戸時代の民家造りの技術を語り、そこに使用されている材料に見入る人も少なくありませんでした。茅葺屋根の家は、つい30〜40年ほど前まで比較的残されていましたが、その後急速に失われたため、昔の民家建築をあらためて見直す機会にさせていただけたものと思います。

また、「昔の子供の遊び」をテーマに、ベীগオマ、竹とんぼ、あやとり、ヨーなども用意いたしました。子供たちだけでなく、大人も子供だった頃の遊びができて、楽しんでいただけたものと思います。昔の子供の遊び道具は、現代のようにスイッチひとつで楽しむものではなく、自分で試行錯誤しながら、少しづつうまくやっていくものです。今回、特に人氣が高かったのはベীগオマで、はじめての子供たちに、ヒモの巻き方などを大人が教える光景がよく見られました。これも旧大石家住宅特別公開の大切なひとコマです。



特別公開は、無事終了しましたが、今後とも旧大石家に親しむことのできる機会を設け、文化財保護にご理解いただけるよう努めてまいりたいと考えております。

旧大石家住宅は、「旧大石家住宅友の会」の皆さんにより維持・管理されています。一人でも多くの方にこのボランティア活動にご参加いただきたく、ご案内いたします。区内在住で平日に参加可能な方を対象とします。主な活動内容は、囲炉裏で火を焚くことや室内外の掃除などです。ご応募お待ちしております。

【問合せ】教育委員会文化財係

☎03(3647)9819

刀剣研磨師・白木さん木屋賞受賞!!

江東区登録無形文化財(工芸技術)保持者の白木良彦さん(古石場1)は、刀剣研磨の技術を高く評価され、3年前の「特賞 千葉賞」受賞に引き続き、第57回刀剣研磨・外装技術発表会の研磨部門において「特賞 木屋賞(第1位)」を受賞されました。木屋賞の受賞は第54回発表会に引き続き2度目の受賞となります。

白木さんは昭和31年生まれ、千代田区九段の刀剣研磨師・故藤代松雄氏のもとで修行し、技能を修得しました。毎年、秋の伝統工芸展において実演していただいております。

江東区伝統工芸保存会、善意の寄付



去る12月6日、江東区伝統工芸保存会(会長・岸本忠雄)が区社会福祉協議会に対して、10月の伝統工芸展と同時開催されたチャリティ「バザール」の売上金の一部を寄附してくださいました。伝統工芸保存会による御寄附は毎年のごことです。



あおく・みる・くく・かく
文化財・工芸技術
鶯替(うそかえ)神事

鶯戸天神は今春も受験生をはじめとする数多くの参拝客で賑わっています。今年は酉年ですので、鳥に関する文化財を鶯戸天神からご紹介しましょう。

文化9年、岸駒の野梅に、小池曲江が黄鶯を書き加えた花鳥図碑(有形文化財・歴史資料)が境内にあります。石の上を走る刻線が繊細で見事なものです。

そして、来る正月24(月)・25(火)日に行われる、区登録無形民俗文化財(風俗慣習)「鶯替」を紹介しなければなりません。これは前年の檜製の鶯を納めて、新しい鶯を買い求める行事で、文政3年太宰府天満宮から移したものとされます。鶯戸天神ではこの神事の縁起を彫った大正5年の板木も登録されています(有形文化財・歴史資料)。なお、鶯は山地に住むスズメ科の冬の野鳥で、雄の体色は青灰色で顔と尾が黒く、ピンクのマフラーを巻いているような綺麗なかわいい小鳥です。今年 は明るく幸せな一年にトリかえていきたいものです。

*記録ビデオ『鶯製作(区登録無形文化財・工芸技術)』貸し出し中。

文化財保護推進員講習会20周年

記念講演会・シンポジウム

文化財保護の地域リーダーを養成する目的で開催してきた江東区文化財保護推進員講習会が、今年度で20周年を迎えました。そこで、区民が参加する文化財保護や、どのように地域の歴史を学習するのかを考えるため、講演会とシンポジウムを開催いたします。地域の歴史に興味があるけれど、学習の仕方がわからないという方、ほかの区ではどのようにしているのかを知りたい方は、他区の学芸員から直接話を聞けますので、ふるってご参加ください。

【演題】地域の歴史を発見しよう!

文化財保護と博物館をとおして

【講師】葛飾区郷土と天文の博物館学芸員

谷口 榮

【コメンテーター】

豊島区教育委員会学芸員 横山恵美

練馬区郷土資料室学芸員 渡邊嘉之

板橋区教育委員会学芸員 吉田政博

【司会】江東区文化財専門員 小泉雅弘

【日時】2月8日(火)午後6時30分

【会場】江東区文化センター6階

(東陽4 11 3)

【定員】50人(先着順)

【申込】文化財係まで電話で

3 6 4 7 9 8 1 9

平成16年度工匠式番館企画展

写真展

伝統工芸を受け継ぐ指先



工匠館では平成4年のオープン以来、さまざまな伝統工芸品とその製作者である職人さんのプロフィールを紹介してきました。今年度の企画展は、工匠番館の常設展示において撮影した写真の中から、とくに工芸品製作過程の手先に焦点をあてた写真展です。渾身の力を込めてノミを握るたくましい手。寸分の狂いなく筆を動かすしなやかな指。伝統工芸品を生み出す指先とその瞬間を是非ご覧下さい。

【会期】2月26日(土)～3月6日(日)

【時間】午前9時～午後5時

【会場】工匠式番館

森下文化センター2階 (森下3 12 17)

入場無料

また、

工匠番館の常設展示替えも予定しています。詳しくは区報でお知らせいたします。



提灯に家紋を描く指先(渋沢昭男氏)